

No.3

番匠 劔持工務店

劔持 大輔

第3期生



大工としての道

番匠劔持工務店は昭和47年に先代である父が創業した。大工になって僅か4年。異例の速さで親方となった父は、致道博物館や神社仏閣等文化財関連の難しい仕事を多く手掛け技術を磨いた。多い時で10人以上の住み込み弟子を抱える「職人の家」。そんな環境で育った劔持さんは、「一度も大工になれと言われたことはないが、大工になる以外の道を考えたこともなかった。」そう若き日を振り返った。

向上心と「番匠」の重み

高校卒業後すぐに番匠劔持工務店で職人としての一歩をスタートさせた。「最初の頃は、仕事に難しすぎて自分には無理だと思っただ。でも、若いころから一つできるようになって、更に上を目指してしまう癖があった。」強い向上心が原動力となり、劔持さんは技術とキャリアを積み重ねてきた。「番匠」とは大工という言葉ができる前に、建物を建てる職人を表していた言葉である。父は敢えてそれを屋号に選んだ。大工としてのプライド。本質を追求し続ける気概。そんな父の想いを肌で感じ、いつしか劔持さん自身の信念となり、向上心の源となっていた。



責任感とプレッシャーが人を育てる

初めて設計から墨付け加工、施工までを全て担当し、1棟の家を完成させたのは28歳の時。「施主から全てを任せてもらった嬉しさ」と責任感、プレッシャーを今でも鮮明に覚えている。「それを第二のスタートとして、31歳で一級建築士を取得。モノづくりの楽しさにどんどんのめり込んで

いった。「施主一人一人から成長させてもらっている。」初めて家を建ててからずっと大切にしていた。「想いだ。」

伝統工法

番匠劔持工務店の手掛ける家は、釘・金物を一切使わない。また工場生産のプレカット木材も使わず、自ら墨付け加工した、地場産の自然素材を木組みすることにこだわっている。知識と経験、そして向上心がなければクレームに直結する難しい工法である。

若手経営者塾で学んだこと

入塾当時、劔持さんは「後継者」だったが、令和3年に父が他界し、本当の意味で「経営者」となった。「昔は技術さえ磨いていれば仕事はあった。でも今は人々の生活スタイルや断熱環境も変化し、伝統工法に新しさを取り入れることの重要性が増している。」そんな環境の中、若手経営者塾の個性豊かな講師陣によるリアルな体験談を通して学んだ、「新しいことを取入れていくマインド」は、今の番匠劔持工務店のスタイルに大きく影響を与えている。

新しいチャレンジ

今施工中の家は、一般住宅の基礎に当たる部分を天然の石で創る「石場建て」、竹こまいを使った土壁、「本燻し瓦」と伝統工法のフルコース住宅だ。「お客様の求める家と自分のやりたいことが完全一致した。」番匠にとって伝統と新しさは常に表裏一体である。



取材当日、訪れた工場には、エドエドが流れる中、夜遅くまで黙々と作業を続ける劔持さんの長男の姿があった。温故知新「劔持さんが父から引き継いだ番匠プライドは着実に次世代へと引き継がれようとしている。」

番匠 劔持工務店

住所／鶴岡市東原町 3-25
鶴岡市北京田 77-2(工場住所)
電話／0235-22-4895
Mail／banshou@shounai.org



つなぐ力で100年幸せな街づくり

鶴岡信用金庫

<https://www.tsuruoka-sk.jp/>